
とある冬の日

桜葉久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある冬の日

【Nコード】

N6908Y

【作者名】

桜葉久遠

【あらすじ】

ある兄妹の日常の一部。冬の早朝に兄と妹は散歩に出かける。妹はふとした思いつきをして……。

部屋の中で吐く息が白い。少年は身を震わせながらも窓を大きく開け放つ。道に白化粧が施され、朝日の光を反射していた。

「兄様？」

銀世界に目を細めていると後ろから少々舌つ足らずな声が聞こえた。少年が視線を向けると、そこでは幼稚園ぐらいの少女がドアの隙間からのぞいていた。

少年が手招きすると部屋の中へ入ってくる。

「どうした、鈴^{りん}？」

「お外に行きたいからついて来て欲しいの」

十以上も歳の離れた最愛の妹がするお願いに少年は相好を崩した。学校では黙っていたれば格好良いと評判の顔が一瞬でだらしの無い顔になる。

シスコンということでも評判になっているのがこの少年だった。

幼稚園の送り迎えから、体調管理、運動会への出席など少々度が過ぎていくくらいである。

「もちろんいいぞ。でも、その前にあったかい服に着替えような」

鈴は素直に兄の言うことにならずいた。

十数分後、二人は防寒具に身を包んで公園にいた。

早朝であるために誰もいない。いるのは歌を奏でる小鳥だけだ。

「兄様、兄様。公園に行きたい」

と鈴が言ったからである。

鈴はマフラーと手袋まで身につけて完全装備だ。動きにくいと鈴は主張したのだが、少年は風邪をひいたらいけないと譲らなかった。鈴は少し動きづらそうにしながらも、雪をかき集めていた。雪だるまを作ろうとしているのだらう。少年はそれを少し離れた場所で温かく見守っていた。

「うんしょ、うんしょ」

まずは小さな雪玉を作り、それを転がして大きくしていく。しかし、鈴の小さな身体ではすぐに転がせなくなってしまった。

雪というものは存外重い。サッカーボール程度の大きさでもそれなりの重量はあるのだ。北方では雪の重みで家がつぶれるなんてこともあるくらいである。

「兄様」

眉を『ハ』の字にしながら鈴が少年を呼ぶ。

手伝って欲しいのだらう。それを察したシスコンの少年は疾風のごとき勢いで駆け寄った。傍から見たらレポートしたかのように見えたかもしれない。

大したシスコンぶりをこういうところでも発揮する少年だった。

「一緒に雪だるま作って欲しいの」

そのおねだりに少年は緩んでいた顔をさらに緩めた。これ以上に緩めたら、もうどうしようもないというくらいまでに。

少年は鈴が転がすのを後ろから支える形を取った。二人で押して再び大きくしていく。

しばらくして大小二つの雪玉が完成する。少年は小さな方を抱え上げ、大きな雪玉の方に積んだ。

「兄様すごい！」

完成した雪だるまを見て、手を叩きながら鈴がはしゃぐ。

しかし、それを鈴はすぐに止めてしまっただけ何かを考えはじめた。首をコテツと横にしてウンウン唸る。

「どうした？」

質問には答えず、鈴は少年の手を引いてベンチのところへと連れていった。

「ここで目をつぶって待って欲しいの」

そう言っただけ鈴は先ほど雪だるまを作った所へ再び駆けて行った。

少年としては最愛の妹から目を離すのは心配ではあるものの、嫌われたらかなわないと言われた通りに目を閉じる。

一分で不安を感じはじめた。

五分で貧乏揺すりを始めた。

十分でベンチを立ったり座ったりをし始めた。

十五分で顔を赤くしたり青くしたりした。

二十分経ち、ついに少年は目を開ける決心をする。

鈴に嫌われるかもしれないと考えると即座に首をくくりたくなるが、鈴の無事を確かめる方が先決と判断したのだ。この瞬間にも鈴が危ない目に合っているのかもしれない。困ったことにあっているかもしれない。そんなことが頭の中で渦巻き、居ても立つてもいられなくなったのだ。

目を開こうとした、その時。

「兄様！」

鈴の元気な声が聞こえた。

少年は慌てて目を閉じ直す。

「……兄様、目を開けてなかった？」

「そんなことはないぞ、鈴。兄様が鈴との約束を破ったことが今まであったか？」

少年の慌てた様な弁明に首を横に振る鈴。

「目は開けていいのか？」

「もうちょっと待って」

そう言う鈴は少年の手を引いて歩きはじめた。大した距離ではない。数メートル程度を歩いただけだった。推測するにあの雪だるまのところだろうか。

「もういいよ」

鈴の許可で少年は目を開いた。目の前にあるのは雪だるま。一つは先ほど、少年と鈴の二人で作ったもの。石や枯れ枝、木の実で飾り付けがなされている。そしてその傍らには。

「小さい雪だるま？」

大きさは二人で作ったものの半分くらいだろうか、不恰好な雪だるまが鎮座していた。

こちらも同様に飾り付けがされている。木の枝で作られた手が、隣の大きい雪だるまとつないでいるように触れ合わさっていた。

そう、それはまるで……。

「兄様と私みたいでしょ？」

満面の笑みで少年を見上げる鈴。

それは桜のような小さいけれど、温かみのあるそんな笑顔だった。少年は心の中に少し早い春の息吹が吹き込んで来る、そんな気がしたのだった。

（後書き）

なんとな〜く書いたものでオチとかそういったものを期待していた方にとっては、肩透かしをさせてしまったかもしれませんね（汗）

それでも出来る限り丁寧に書いたので駄文にはなっていないかと…。

感想、批評、アドバイスなど（批判は心が折れてしまうかもしれな
いです）がありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6908y/>

とある冬の日

2011年11月21日09時49分発行